

兵隊さん好き

宮川行志

昭和十六（一九四一）年四月一日から、これまで尋常小学校と呼ばれていた初等科教育学校が国民学校令により「国民学校」と改称され、皇民化教育体制が発足した。

国民学校令第一章「目的」の第一条に、「国民学校は皇国の道に則りて初等科普通教育を施し国民の基礎的練成を為すを以て目的とす」と、皇民化教育を声高らかに宣言したのである。

これにより大東亜戦争への道を、一年生として入学した米國勝蔵たちはこれからひた走りに走り出すのだ。

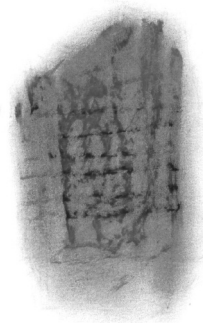
勝蔵は、校門の真つ新のピカピカの檜板に墨書された「不知火国民学校」に入学した。代用品流行りの当世、制服はラミーや桑の皮の繊維で作られ、ボタンは金ボタンではなく黒い陶製で固い物にぶつかると割れはしないかと気を

遣うし、背負っているランドセルも馬糞紙を糊で固めた代物だが、当人はそれでも意気揚々たるものだった。

登校は軍隊式で、集落単位に組織された「少年団」単位の集団登校であった。少年団長の号令で全ての行動をした。団長は高等科二年の、体格も大きい隣保班内の村上秋義さん。この少年団の新入生は勝蔵だけであった。少年団は常に二列縦隊で歌をうたいながら、リズムに歩調を合わせた。今日は土曜日で、半ドンである。学校の授業は午前中だけで、午後は放課になる。半ドンの「ドン」は休みとのことである。

土曜日の朝はみんなニコニコしていて元気がよい。登校の行進の歌声にも力が入る。

一、肩をならべて兄さんと／今日も学校へ行けるのは／



兵隊さんのおかげです／お国のために／お国のために戦った／兵隊さんのおかげです

二、夕べ^{ゆう}たのしい御飯^{ごはん}とき／家内そろって語るのも／兵隊さんのおかげです／お国のために／お国のために傷ついた／兵隊さんのおかげです

三、淋しいけれど母さまと／今日もまどかに眠るのは／兵隊さんのおかげです／お国のために／お国のために戦死した／兵隊さんのおかげです

四、明日から支那の友達と／仲良く暮していけるのも／兵隊さんのおかげです／お国のために／お国のために尽くされた／兵隊さんのおかげです

兵隊さんよありがとう／兵隊さんよありがとう

「兵隊さんよありがとう」作詞・橋本善一郎、作曲・佐々木すすむ

村上少年団長が、二番から四番までは難しいから一番だけをくり返し歌おうと言って、一番だけをくり返し、最後に「兵隊さんよありがとう」を二回くつつけた。曲が行進曲風で歩調が合わせやすかった。どの少年団も勝蔵たちのように縮めて歌うようになった。誰かが「兵隊さんよ」を「屁たれさん」と替えた歌い方をして、みんなで大笑いした。この歌は、勝蔵が国民学校に入学する三年前に、朝日新聞社が一般募集した「皇軍将士に感謝の歌」の入選二位の

歌だと伝えられている。

土曜日の半ドンは、大人にも子供にも待ち遠しい日である。七月の第一土曜日の朝、母ミナから「今日は道草せずにさっさと帰ってこいよ」と優しい笑顔で、そつと言われた勝蔵は、きつと何か良いことがあるのに違いないと思い、飛ぶようにして帰った。

家では父と母がいつになく小綺麗にしていた。母は他所^{よそ}行きの着物を着て、父市蔵は珍しく背広を着込んでいる。

勝蔵にも四大節の時や隣町に出かける時だけ着る、草色の陶製ボタンのついた新しい制服が出されていた。

火鉢の南部鉄瓶の口から、勢いよくシュンシュンと蒸気が吹き出している。

「今日から一週間、ひなごにゆ^ゆ湯治^{とうじ}に行くから、お前も今夜だけ一緒に泊まって、明日は父さんと帰れっ」

母が言い渡すと、続けて父が言った。

「ひなごじゃないぞ。日奈久^{ひなぐ}たい。昔からひなごと言うとつたからな、この辺りでは」

勝蔵は「ゆとうじ」が何のことか分からなかった。勝蔵たちの在所では、六月の忙しく骨の折れる田植えが済むと隣近所連れ立って骨休めと称して日奈久の自炊できる旅館に一週間くらい滞在し、温泉に浸かって体の回復を図るのを習慣^{なづか}しとしていた。このことを誰かが間違って、「ゆと

うじ」と言ったことから、「湯治」にさらに「湯」一字加えて「ゆとうじ」と言ったという。

勝蔵はこれまで温泉など知りもしないし、もちろん入ったこともなかった。日奈久温泉は、勝蔵たちの在所から一番近場の温泉である。田植えあとの日奈久温泉での骨休めは、夏場の苦しい田の草取りや、雁づめ押し、秋の刈り取りに向けての、体力回復の大切な行事であった。

母ミナは持っていく着替えなどをトランクに詰め込んだ。最後に米を小分けして、七つほど詰めた。湯治滞在中の食料である。

勝蔵は生まれて初めての外泊旅行がうれしくて、踊り出したい気分であった。部屋の中をスキップして動き回っていると、ミナから「じつとせんか」と叱られてしまった。

勝蔵は神妙に火鉢の前にじつと座った。目の前の鉄瓶からは蒸気が勢いよく出ている。勝蔵は吹き出る蒸気がどんなものかと思ひ、顔をそっと近づけた。「あっ!」。眉間に蒸気が当たった。熱かった。痛かった。一銭銅貨ほどの軽い火傷をした。

出発前の支度で気の立っていたミナに、「このバカたれが、蒸気が熱かつも分からんとか!」と一喝された。洗面器に水を入れ、顔を冷やした。眉間の真ん中に発赤ができた。ミナは、「迷子にならんための印したい。よか印し

たい」と言つて、アツハツハと笑い飛ばした。

母ミナは大きなトランク二個を振り分けにして、父市蔵は七つの袋の米を両手に提げた。勝蔵は味噌樽の小さいのを提げて出発した。

日奈久は在所から六つ目の駅である。蒸気機関車の客車に揺られ、二時間かけて一家三人は無事、日奈久の駅に降り立った。

駅前には馬車立場があり、幌をかけた馬車が五、六台、屯していた。駅から温泉街までは少し距離がある。荷物が多く、七月の午後の陽は容赦なく照りつけている。父市蔵は馬好きで、ひところ競走馬を飼育していたので、馬を見て相好を崩す。黒鹿毛、鹿毛、葦毛が揃っている。

市蔵は珍しい葦毛の馬車の御者と二言、三言しゃべると、提げている米袋をさつさと積み込んだ。御者が母ミナのトランクを、「重かですな。よう、これを担いでこられましたね」とねぎらつて積み込んだ。三人は幌のかかった客席に乗り込む。

御者が「ハイヨッ!」と掛け声をかけると、トコトコと走り始めた。馬は夏日に照らされ、見る間に大汗をかく。尻と腹には白い汗の泡がへばりつき、首筋から汗がしたたり落ちる。馬の体臭が、むっとくる。市蔵はその体臭に鼻をひくひくさせ、いい匂いだと言っている。

馬車は温泉街の広場で停まった。広場には旅館名を染めた半被を着た男たちが待つていた。市蔵が「吉野屋」の半被を着た男を手招きした。男はもみ手をしながら、「お早にお着きで、お待ちしていました」と言つて、トランクと米袋を担いで道案内をした。

吉野屋は食事付の泊まりが二階、自炊客が一階に分かれていた。大浴場が自慢で、男女二つが用意されている。一階の廊下には煮炊き用の竈と七輪、蛇口、調理台、包丁、鍋釜が所狭しと並び、部屋は襖で仕切られた小部屋がハーモニカのように行儀よく並んでいる。母ミナの一週間の生活拠点である。父市蔵は在所の寄合が続くので、勝蔵と一晩だけ泊まる予定だ。

夕方になり、温泉街広場にある露店に、夕食のお菜を三人で見物がてら仕入れに行った。天幕の下に魚や野菜、土産物などが雑然と足の踏み場もないほど広げられている。ミナは、鯛の粗、鱧、太刀魚を求め、大通りの五軒の竹輪焼きの実演を見物した。その中の一軒、「岩崎竹輪」に入り、焼きたての竹輪五本を求めた。晚餐の材料は揃った。

夕食前に勝蔵は温泉宿自慢の大浴場に入った。火傷の傷には「蝦蟇の油」をつけていたので、少しピリピリしたが何ともなかった。

温泉は室町時代に湧出した弱食塩泉で、効能はリュウマ

チ・神経痛・創傷・痛風に効く。勝蔵の眉間の軽い火傷にも効くとのこと。勝蔵は大浴場で思いつき泳いだ。眉間の火傷は何ともなかった。

夕食は、勝蔵たちが湯に入っている間に、母ミナが手早く整えた料理が卓袱台に並んでいた。鯛の粗煮、鱧の天ぷら、太刀魚の刺身と塩焼き、野菜の煮浸し、蒲鉾、それに竹輪が載っていた。父と母は酒を注ぎあい乾杯した。

勝蔵にはラムネが用意されていた。勝蔵は竹輪二本で双眼鏡の真似をして、「見える、見える。兵隊さんが進んでいるのが見える」と叫んだ。国語で「兵隊ススメ」を習ったばかりだった。父も母も、少し酔って上気した顔で笑っている。勝蔵にとつての幸せな夜が更けていった。

翌早朝、父市蔵に起こされ散歩に連れ出された。鳩山海岸にある造船所の船台に、大きな竜骨が巨大な怪獣の肋骨のように並んでいる。市蔵は船台に登り、竜骨の背骨を両手を広げて抱こうとしたが抱ききれず、苦笑しながら言う。「この機帆船は二〇〇噸はあるだろう。船尾に大きな穴があいている。あれはスクリュウの軸穴だ。風を帆でとらえ、燃料が節約できるし、荷物も一時に二〇〇噸も運べる。木造船だから鉄節約で安上がりだ。鉄は軍艦用だからな。今、戦争直前だからこんな船を沢山造っているんだ。ほら見る。天草の島々が見える。天草は松の木の大木が多いので、

どこも機帆船景気でわいているそうだ。松の古木が船造りには最適なんだ。水に強い木だからな。これで船成金がだいぶ増えるだろう。吾が村には造船に適した土地も松の木もなかったからなあ。一儲けしそこなつたな。ハッハッハ父市蔵は、どうもこれで一旗揚げるつもりだったらしい。

勝蔵は日奈久名物の竹細工を土産に買ってもらった。竹製の機関銃の玩具は、銃身が紫色に塗られ、引金を引くのではなく回すとバクバクバクと音が出た。戦争ごっこでこれを使えば百人力、皆驚くだろうな。

一週間後、母ミナは日奈久土産の竹細工物を山ほど担いで帰ってきた。柄杓、杓子、箸、手籠笊、豆腐籠、花筒を親戚に配って回る顔は、湯治で元気が回復し、皴も心なしか減って見えた。母が若返って見え、勝蔵はうれしくなった。

昭和十六年七月十七日、中等学校・国民学校の夏休みを八月一日から三十一日までと決定し、文部省が夏休み短縮を指令した。

勝蔵にとつて国民学校に入学して初めての夏休みである。戦争勃発寸前の紀元二千六百年祭直後の高揚した、米英何するものぞの気概が色濃く巷間に残っていて、流行病に罹ったような熱気が高まっていた。

去年、九人兄弟の末っ子の勝蔵とは十八歳差の次姉テル

が、陸軍准尉・安村秋一と結婚した。そして今年七月下旬、男子誕生。母ミナがテルの産後の手伝いに行くことになった。母は末っ子の勝蔵を猫可愛がりして腰巾着のようにどこに行くにも連れ歩いていて、これも一緒に行くことになった。

革張りのトランクの他、大小四個の大風呂敷に、着替え、襦袢、米などを荷造りする。大きいのは母ミナの振り分けにして担ぎ、小さい二個を勝蔵が提げた。重いので引きずってしまふ。

在所の駅のプラットホームから我が家の方に向かって、勝蔵はうれしさのあまり手を振った。動輪が三つのC型蒸気機関車が、白い蒸気を線路いっぱい撒き散らして止まった。

座席は四人がけで、紺色のビロードがふかふかしている。網棚にトランクを上げようとするミナの後ろから、いきなり、にゅーっと男の太い掌が伸びてきて、トランクを軽々と棚に載せてくれた。向かいに掛けていた兵隊さんの手であつた。色が白くて若い男前の兵隊さんだ。

勝蔵はすばやく兵隊さんの襟の階級章を見た。この時代の子は皇国民教育を受け、誰もが兵隊さんが好きだった。

「星二つだ。上等兵さんだ」

勝蔵がミナにささやくと、兵隊さんは頬をゆるめて立ち

上がり、さつと挙手の敬礼をした。勝蔵はうれしくなり、少年団でいつも訓練している時よりも力強く、「敬礼」と言つて学帽の横に手を斜めに構え、挙手の敬礼をした。

兵隊さんは「元氣いいね。しっかり勉強してお国のために尽くすんだよ」と言つて、頭を撫でてくれた。

「この子は無作法者で横道かですもん。お国のためになりますものやら……。兵隊さんのように立派になりますやら。お励ましのお言葉ありがとうございます」

母ミナが礼を言う横で、勝蔵が小さな声で歌い出した。少年団の朝、登校時に歩調を取りながら歌う、あの歌だ。

「肩をならべて兄さんと／今日も学校へ行けるのは／兵隊さんのおかげです……／兵隊さんよありがとう」

勝蔵はいつの間にか座席に立ち上がり歌っていた。四方八方から拍手が起こる。兵隊さんもニコニコ顔で、「ありがとう」と言つて敬礼をしてくれた。勝蔵はみんなにぺこんと頭を下げた。兵隊さんは何度も何度も頭を撫でてくれた。掌が温かかった。

「岩崎上等兵、元氣が出ました。ありがとうございます」
勝蔵はもう一度言つた。

「兵隊さんよありがとう」

母ミナは身の置き所がない恥ずかしさに、身を締めながら言つた。

「ほんにこの子はいつでも、とつけむにゃこつ（とんでもないこと）ば、すつとですもん。兵隊さん、気を悪くせんでくだはりませ。こん子は兵隊さんがいさぎゅう好きですたい。こん子の姉婿殿も軍人さんです。それでうれしくなつて歌つたんですたい」

「この息子さん、好か息子さんですよ」

大好きな兵隊さんから褒められて、勝蔵はたまらなくうれしかった。

「あ痛つ！ 眼に石炭ガラがきやめ入つたばい。痛か！」
母ミナが手で眼をおおつた。煤煙止めの網戸を下ろしていなかつたので、蒸気機関車から吐き出される煙に混じつた石炭の燃え殻の微細な粒が眼に入ったのだ。

勝蔵は慌てて自分の手拭いを腰から取り出し、唾をつけてミナの臉をひっくり返し、黒いゴマ粒ほどの石炭ガラを取り除いてやつた。いつも戦争ごっこで泥粒が入るのを取り除いているので、手慣れた手際の良さだった。

「ああ痛かつた」と、母ミナは眼をしばいた。眼には石炭ガラより涙の方が多かつたように勝蔵には見えた。何でおつ母さんは泣かつとだろか？ 勝蔵は不思議に思い、母を見上げた。

「国民学校一年に入学してから、この横道者が優しくしてくれるもんで、ついつい涙がこぼれたとたい」と、そつ

と言った。勝蔵は恥ずかしくて、顔をおおって座席に倒れ込み、いつの間にか眠ってしまった。

目を覚ますと、汽車は春日町の熊本駅に着いたところだった。兵隊さんもここで降りる。

「坊ちゃん、岩崎上等兵もがんばりますので、勉強ががんばりなっせ。勉強ができる時は今しかない。精一杯がんばることです。お母さん、今日は坊ちゃんのお陰で元気を貰いました。支那大陸では日本軍ががんばっています。自分もいつか戦地に出陣します。お国のために命を捧げることは軍人の本分であり、名誉なことです。ごきげんよう」と挙手の礼をして去ろうとした。

母ミナは何を思ったのか、トランクを開けて自分が縫った「千人針」を差し出した。

「私は庚寅年生まれ（明治二十二（一八〇九）年）で、村では軍人が出征するたびに、私に『千人針』を縫ってもらいにおいでます。『虎は一日のうちに千里行つて千里帰る』と言い伝えられています。これにあやかつて結び目で虎模様を作り、再び無事に戦場から帰ってくるようにとの願いが込められております。どうか、この千人針の腹巻きを締めて帰つて来て下さい」

「ありがとうございます。戴きます。自分は八代日奈久の岩崎であります。実家は竹輪屋であります。日奈久にお

いで節は、どうか竹輪屋にお寄り下さい。身に余る贈り物、肌身離さず必ず戦地から帰つて参ります。ありがとうございます」と挙手の敬礼をした。

「ではお達者で、弾丸の下をくぐつて必ず帰つて来て下さい。日奈久湯治で岩崎の竹輪を沢山食べました」

勝蔵も挙手の敬礼を返し、「僕も岩崎の竹輪、沢山食べました。うまかったです。以上」と言つた。

母ミナは涙を拭いていた。岩崎上等兵は靴音高く跨線橋の階段を駆け上がつて行つた。

岩崎上等兵と別れたあと、二人は荷物も多いことだし、贅沢だがダットサンのタクシーを奮発して、次姉テルの子飼橋の借家に急いだ。

白川の河原に近い住宅街に入ると、二階建ての同じ造りの家がびっしり建て込んでいた。白川は工業専門学校の裏からゆつくりと蛇行し、広い河原に砂洲をつくっている。

母ミナは学問はなかったが記憶力がしっかりしていた。次女テルの結婚式の時、一度来ただけの家の道順を覚えていた。同じ造りの一軒でダットサンを停めた。

家は、白川が子飼本町の北側の崖に当たつて大きく湾曲して右側でできた、三角洲の河原の間近にあった。その近くには「砂採り船」が五、六艘、錨を打つて船首を申し合わせたように上流に向けて舳つていた。褌一つに筍の皮

で編んだパッチョ笠を被った船頭が、砂を胴の間に掬い込んでいる。勝蔵はこの風景を見て、一刻も早く船頭さんたちの傍に行きたかった。

姉テルの玄関前の電柱の根っこから、馬の小便の臭いが立ち上ってきた。飼育していた馬のアオの懐かしい臭いでもあった。よく見ると乾いた馬糞も落ちている。馬を飼っていないのに都会でこんな臭いのするのが妙に気になった。母ミナが玄関のガラス戸を勢いよく開け、「今着いたぞっ。テル、おっとかい」と声を掛けた。

「はい、おります」と声がして、アッパッパ姿のテル姉が現れた。

「おっかさん、このたびはえらい面倒をかけます。よろしくお願いします」と他人行儀な挨拶をした。

「なんのなんの、これはあんたたちのためじゃないと。お国のためだ」と言つて、母ミナはクッククックと笑いかみ殺した。「そぎゃん、とつけむにゃこつ（とんどもないこと）言うてお父つつあんば騙くらかして来たどたい。そぎゃん言わにゃ出てこられんどが」

生まれて三十日、日明けの男の赤ん坊は本当に赤かった。勝蔵は人間の赤ちゃんの皺の多いのに驚いた。こんな皺ばかりの赤ちゃんが大きくなるのが不思議だった。「産めよ増やせよ」の標語に姉は乗ったのかもしれない。軍

人さんの奥さんだから。

「男の子ばかり産むとお国から表彰さすどたい。あんたは看護婦だけん、働きながら子供を育てることは難しかばい。おらあ九人も産んだから、よう分かるとばい。男ん子は兵隊さんに取られるとばい。女ん子は取られんと。あんたが婿殿は軍人さんだけん、戦地に出征したら……」

母ミナはそこまで言つて口を嚙んだ。

襦袢、砂糖、マツチ、煙草、米など、こまごました不足気味の日用品をトランクから取り出して、床の間に並べた。母ミナは目端の利く人でもあった。持ち運んできたトランクの中身は当時の統制品で、切符制など配給制になっていた品物が多かった。娘を思う親心のこもった品物であった。母ミナと姉テルが話し込んでいる間に、勝蔵は風呂場を探し当て、そこで番禪に着替えた。黒布に紐のついた水泳用の兵児禪を締め込んだ。

「母っさん、泳いでくる」と言うど裏口から裸足で飛び出し、河原に急いだ。

上流に舳先を向けて錨を打つて、五艘の砂採り船が舫っていた。親方たちがスコップで砂を船胴から掬い上げていた。年輩の親方さんが手を休めて勝蔵に話しかけた。

「坊主、泳ぐのか。ここの曲がりの岸下の洲には絶対近寄つたらいかんぞ。あそこは渦巻いていて、河童が淵の底

に引き込んで溺れさすと。夏目漱石という偉い人の奥さんが身投げさした所たい。恐ろしい淵だから近寄るな。この砂洲の浅い所で泳げ」

日に焼けた年嵩の親方さんは、ちよつと見は怖そうだが、勝蔵にすっかり注意してくれた。

「坊主、学校に上がつとるかいかい？ 小学校何年生か。俺の子は三年生だ」

この親方さんは気軽に話しかけてくれる。

「坊主、大きくなつたら何になりたいか」と、いきなり問うた。

夏休み前に受け持ちの先生が、大きい腹を抱えて一日だけ学校に来られた。その時、一人一人に「大きくなつたら何になりたいですか」と聞かれた。百姓、漁師、大工、井戸掘り、そして建具屋、屋根替屋、竹屋、籠屋、左官屋など「屋」のつく商売を答える者が多かつた。女の子はたい「お嫁さん」とか「お母さん」と言った。

勝蔵だけが「兵隊さん」と答え、頭の良い文雄が「陸軍大将」と答えた。単に大将ではなく、陸軍をつけていた。大将は誰でも知っているが、陸軍とつけたところがさすがだった。少し知恵の遅れている利男が「天皇陛下」と言ったら先生は慌てふためいて、「罰が当たります」と叱られた。なぜいけないのかの説明はなかつた。

勝蔵はその時のことを思い出して、「兵隊さん」と親方さんに答えた。

「おお、そうか。男はみんな兵隊さんになるからな。ほら、あそこに砂を積んだ馬車がいるだろ。あれに積んで十三連隊の野砲隊に運ぶんだ。坊主、兵隊さんになりたいか。第六師団は日本最強の陸軍だ。その野砲隊だ。俺も五年前にあそこに行ったんだぞ。坊主、偉いだろ。立派な兵隊さんだったんだぞ」

この恐いようなおじさんは偉い人だと思った。

勝蔵は、小学何年生かと尋ねられたことの意味が分からず、こう言った。

「おじさん、おらあ小学校じゃなか。おれが行きよる学校は国民学校」

「ふーん、そうかい。国民学校……ね。去年までは確かに小学校と言うとつた。去年、おとしの国民精神総動員が決まった時から、世の中がどんどん変わり始めたなあ」

おじさんは砂採り船の荷馬車立場の近くに下って行き、荷馬車の車輪が半分水に隠れるので、馬と一緒にどんどん入ってくる。豪快で勇ましく水飛沫が上がる。前脚で水を掻きながら太い脚で水を叩いて、さらに大きい水飛沫を上げる。

勝蔵は砂採り船につかまりながら「馬車のおじさんの馬

は太かねえ。どのくらいあつと？二百貫はあるかい」と尋ねた。砂採り船のおじさんが横合いから声を掛けてきた。「国民学校一年生にしては勘がいいな。俺もこの馬はそのくらいの重さはあると思う。騎兵隊の馬ではない。この型の馬は輜重隊しちゆうたいの型だろ。こんな良か馬なら召集令状の赤紙が来ても甲種合格たい」

「馬に召集令状があることは知ってる。吾が家のアオが甲種合格だったから。自分が一生懸命育てた馬ば陸軍にとられるとはきつかばいた。『吾が子が召集されるごつつきつか』と父は言うとりました。他人は名誉なこととか祝い事とか言つて喜んでるが、そこまで育てた家中の者がきつ目にあうとですよ」

勝蔵はアオが出征していった時のことを急に思い出し、涙声になった。

それまで黙つて砂を袋詰めしていた荷馬車のおじさんが、「ダー、ダー、ダー」と言つて馬の長い鼻面を撫でながら、しんみりと呟いた。

「本音で言えば、この馬は出征させたくなかない。万が一にも、この馬が戦地から帰ってくることはなかるう。俺の仕事も、この黒龍号が出征すれば廃業たい。この馬は黒鹿毛ばつてん、気が荒かけん軍馬にはもつてこいと、陸軍の係官は太鼓判を押されたが、馬を手放す身になるとつら

かばい。仕事の大黒柱ば失うのだからなあ」

そして両眼を掌で拭き、チンと手鼻をかんだ。勝蔵は、しいんとした気持ちになって、黒龍号の鼻面をそつと撫でた。黒龍号はブッブー、ブッブーと掌に生温かい鼻息を吹きかけて、首を甘えるように上下させた。

馬にも戦争が迫っていた。馬は生きた武器として戦場へ駆り出されるようになり、昭和十五年に比べ昭和十六年には、勝蔵の田舎の村でも馬耕用や輓馬ばんばはめつきり少なくなっていた。

おどんげの田舎の百姓やの馬も、どんどん出征しよつと……。勝蔵はアオのことを思い出していた。

「軍馬にも種類があるんだ。乗馬、輓馬、駄馬だばがある」と荷馬車のおじさんが言った。

砂採り船のおじさんが話す。

「戦争の時の前線を支える兵站へいたんの元輜重兵だったんだ、俺は。兵站は前線の部隊のために後方において連絡・交通を確保し、車輛・軍用品の輸送・補給修理などをする。それを支えるのが輜重兵。輜重隊の兵士は、兵ではなく、輜重卒と呼ばれ、荷物運びだけの戦わない兵隊だ。戦うことより一個でも多く荷物を運ぶのが任務。輜重卒には満足に銃すら撃たせなかつたからな。つらいことよ。敵から攻められても、弾丸たまを運んでいても撃てない。馬は大きいから

一番狙われやすいからな。馬は倒れたらおしまいだ。馬を守ることに力を注ぐのが輜重卒の使命だからな……」

砂採り船のおじさんの話は難しくて勝蔵にはよく分からなかったが、戦わない兵隊で、兵ではなく卒ということが心に残った。

砂採り船のおじさんは馬に「ダー、ダー」と声を掛け、鼻面を優しく抱いた。馬は甘えるように抱かれたまま、プフッフッフ、プフッフと鼻を鳴らしながら大きい眼をしばたいた。涙がキラリと光った。

「同じ兵隊の中でも、こんなに馬鹿にされたんだからな……。戦わん兵隊でない兵隊が輜重隊で、馬並みの扱いだった。俺らあ、生まれた時から馬と一緒に育ったからな。馬と一緒に馬鹿にされてもよか、と思つて輜重隊に入隊したんだ。馬の扱いは負けんだつたが……」

砂採り船のおじさんは急に改まった様子で、「おい、一年坊主、名は何というんだ。勝蔵か、いい名だ。敵に勝つぞーと勇ましい名だな。勝蔵君、馬を可愛がつてくれよ」と言つて、馬の口の周りの白い泡を拭いた掌で、勝蔵の頭を撫でてくれた。馬の草いきれのような臭いが鼻にツンときた。勝蔵はおじさんの気持ちがよく分かった。馬の汗の臭いが気持ちよかつた。

「オーラ、オーラ、ダー、ダーッ」

荷馬車のおじさんが声を掛けて、砂を満載した荷馬車を発進させた。手綱の先をくるくる回しながら、口笛を気持ちよさそうに吹いた。「めんこい仔馬」の曲だ。勝蔵は口笛に合わせて大声で歌つた。

一、濡れた仔馬のたて髪を／撫でりや両手に朝の露／呼ばば答えてめんこいぞ／オーラ 駆けてゆこかよ丘の道／ハイド ハイドウ 丘の道

二、藁の上から育ててよ／今じゃ毛並も光つてる／お腹こわすな風邪引くな／オーラ げんきに高くないてみる／ハイド ハイドウ ないてみる (略)

〔作詞…サトウハチロー、作曲…仁木他喜雄〕

七月二十七日、子飼町の安村准尉（姉テルの夫）の借家での三日目の夜、河原の馬繋ぎの横木に五頭の将校用の軍馬が繋がれ、若い当番兵がそれぞれつきそつて水を飲ませ、話をしていた。

この夜、金筋三本で星のない襟章をつけた五人の准尉が、安村秋一の借家に集まっていた。准尉は准将校である。兵卒から叩き上げた軍人なのだ。当時の第六師団（司令部…熊本）の兵力は二万九四〇〇人の第一線の小隊長が准尉の指揮下にあつた。